

企業年金  
—新国際会計基準(IFRS)導入による影響—

金融学科 4年

浅井すみれ／大野紗恵子／北原千尋

<論文の趣旨>

2000年に退職給付会計基準が導入されて以降、年金資産の積立不足が問題となっている。また、我が国では新国際会計基準(IFRS)との主要な差異を解消することを目標にしており、コンバージェンスに伴った会計基準の改訂によって、企業の会計数値に大きな影響が及ぶことが予測される。本論文では、企業の退職給付債務問題に注目し、退職給付制度の現状や、現在導入が検討されている新国際会計基準(IFRS)が企業に与える影響について、実際の上場企業データを利用して分析を行い、我々が将来年金を受け取るためにはどのような対策が必要かを明らかにした。

本論文は、全5節からなり、以下の構成を取っている。第1節では、年金積立不足について触れるとともに、本論文の研究内容について簡単に述べた。次に第2節で、現行の退職給付会計制度について概観し、即時認識と遅延認識について説明を加えた後に、企業の積立不足問題とその現状について実際のデータを示して考察した。

続く第3節では、IAS19号見直しの経緯と退職給付に関する会計基準の予備的見解を概観し、我が国における退職給付に関する会計基準の公開草案を確認した。それを踏まえた上でBS即時認識について考察した。

そして第4節では、新基準導入による影響を財務諸表に対する影響と上場企業に対する影響に分けて考察した。上場企業に対する影響では、「日経NEEDS Financial Quest」から入手した実際の財務データを用いて企業の純資産に対する積立不足率を計算し、新基準導入の影響を考察し、その対策について論じた。また最後の項では、従業員の年金問題が取り沙汰されてきた日本航空に注目し、連結財務諸表を用いて新基準導入の影響を考察した。

最後の第5節では、本論文で述べてきたことを踏まえ、退職給付に関する会計基準の改訂がビジネスパーソンの人生設計にも大きな影響を与える可能性や、企業や政府がいち早く対策を講じる必要があるということを述べた。